

# 私のターニングポイント

第10回

「きぼうのいえ」「なかよしハウス」の女将/  
NPO法人「山谷・すみだりバーサイド支援機構」理事

山本美恵さん

撮影 林田摂子

# 「人生の最期にあたたかい時を！」 ドヤ街の山谷でホスピスを始めました

一冊の本がある。「東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。」(山本雅基著・実業之日本社)。帯の文は「ここはおじいちゃんの少年院!?!」。めちゃくちゃ面白そうなんだけど、さて実際は?

本によればホスピスの入居者は元日雇い労働者やホームレスの人が多い。さぞかし強者揃いでは、と思いきや、ホントにそうらしい。

「確かに最初は皆さんすごく緊張していて、〇〇さんなんて声をかけようものなら、「なんだ、バカヤロー」って怒鳴られたり、自分を守ってウウウと唸っているような…。これまで散々傷ついて人間不信の塊みたいになっている人が多いですよ」と山本美恵さん。

ホスピス開設から5年、女将さん役として施設を切り盛りする美恵さんは、「でもね…」と微笑む。

「口をきかない、目も開けてくれない方のお部屋にスタッフが日に何度も行って、あっ、今日はちょっと聞き耳を立ててくれた。今日は少し目をあけてくれた。あれ、声が出ましたって。みんなが本当に根気よく1週間、1ヵ月と関わっていくうちに、ここでは怒られたりしない、拒まれない、自分の生き方を認めてくれる…と感じて下さる。落ち着くと表情が穏やかになるんですよ。そういう変化を見ているから、私たち、手強い人ほど燃えちゃうんです(笑)」

## 安心して暮らせる 終のすみかを

浅草の隣、南千住駅近くの<sup>なみだばし</sup>泪橋交差点を囲むように○×旅館や△□ホテルといった日雇い労働者のドヤ(宿)が軒を連ねる「山谷」。高度成長の終わりとともに地図から消えたこの町の名が今も息づくドヤ街の一角に、2002年の秋、在宅型のホスピスケア施設「きぼうのいえ」が誕生した。

施設長の山本雅基さんと妻の美恵さんが貯金をはたき、銀行から借金し、キリスト教教会や多くの人の協力で開設した「身寄りがなく、行き場を失った、余命にかぎり

のある人たちのための家」だ。

「僕のイメージは、インドでマザー・テレサが開いた行き倒れの人の施設『死を待つ人の家』の日本版かな。もっとも僕は行ったことないんですけどね(笑)」と雅基さん。ゆったりと心地いいペースの人だ。美恵さんにも似た雰囲気がある。例えば入居者の部屋を個室にした理由を訊ねると――

「その人の生涯の終のすみかであるためには、安心しておならができる、思いっきり泣くこともできる空間がいいなあとと思って」

安心しておならができる! そんなりアリティにぐっと惹かれる。



在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」

2002年10月、山谷(東京都台東区清川)に、「病気や障害、失職、家族離散など、喪失感や挫折感で傷ついた魂が、最期のひとときにも癒され、人との交わりを回復しながら、自らの人生を肯定して旅立つことができるように」(山本雅基施設長)と在宅ホスピスケア施設(全21室21床)を開いた。隣に緊急一時保護施設「なかよしハウス」(全11室11床)も開設。母体となる「山谷・すみだリバーサイド支援機構」が2006年にNPO法人に。ホームページは<http://www.kibounoie.info/>

(撮影: きぼうのいえボランティア 島田純江)



入居費用は生活保護費（小遣いを除く）をあて、介護保険による訪問介護や、訪問診療・訪問看護と連携してケアにあたり、開設から5年で54人を看取ってきた。

## 亡き恋人がくれた 思いがけない贈り物

「きぼうのいえ」の始まりは7年前、雅基さんと出会ったことだった。もしかしたらこの出会いは事故死した恋人からの贈り物かもしれない、と美恵さんは振り返る。

高1の時、友だちが病気で急死した。「人の役に立ちたいから福祉系の大学に行く」。若干15歳でそんな夢を抱いた友に驚いた。彼女の遺志を継ぎたかった。看護師だった母親の影響もあって看護学校に入り、循環器系の病院に就職。クリニックに転職したが、外来看護師の役目をとことん考え、患者を不安にさせない工夫を試みた。

だがしかし、歯車が少しずつ狂っていく。妻子ある人を愛してしまい、何度か駆け落ちを試みては失敗。やがて職も住まいも失い、32歳にして路頭に迷ってしまったのだ。

物を書くことが好きだった美恵さんは、看護師から看護雑誌の編集者へと転身した。恋人への思いは募るばかりだったが、一緒には暮らせない。「お互いに愛する人の幸せを遠くから祈り続ける、そんな愛の形を選ぶしかなかったんです。そんなつらさを仕事に向けて、死に物狂いで働きました」

寝る間も惜しんでつくった雑誌がヒットするなど仕事への評価は

高まったが、睡眠不足で健忘症になったこともあった。そんなある日、恋人の友人から電話が入った。「亡くなったのを知っている？」

あと半年で出会って20年。その日が来たら一緒に住もうと約束した恋人が仲間と山に入り、事故死したというのだ。この出来事が美恵さんの価値観を大きく変えた。

「彼が亡くなってから、人は死ぬとどうなるのか、人は何のために生きているのか、書庫にこもって必死に探しました」

2年ほどしたある朝、亡くなった恋人に美恵さんはこんな願い事をした。「疲れちゃった…。誰か話し相手を紹介してくれない？」と。条件は「あなたみたいに何かに夢中になって突進していく人、社会的にはバカと言われ、相手にされないくらい誠実な人」と添えた。

その日の夕方、上智大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」を聴講しに行った。そこに「きぼうのいえ」のボランティアを探すため、雅基さんが参加していた。

山谷にホスピスを、と熱心に語る雅基さんの話に涙が出たという。「なんだか面白そう。私もやりたい。そんなノリだったんです」

## 山谷全体をホスピスに。 ヘルパーステーションを開設

2006年3月、「きぼうのいえ」に、ヘルパーステーション「ハーモニー」が開設された。美恵さんたちは隣接するアパートを一棟借り上げて、生活に困難をきたしている人のための緊急一時避難施設「なかよしハウス」（全11室）も運営し

◀ 冷蔵庫、クローゼット、洗面台、表札付き。「家」にこだわった（写真上）。雅基さんは美恵さんを「ソウルメイト」と語る。ある入居者は夫妻を「ニコイチ」と呼ぶ。「二人で一人前ですって（笑）」と美恵さん（写真3枚目）。



ている。2施設の入居者32人。必要に応じて外部のヘルパーがケアを提供しているが、自前にすれば経営の一助になる。何より入居者と介護者の関わりが深くなれば、「入居者に人間的な関係性を回復してもらいたい」という「いえ」設立の趣旨にもかなう。

さらに「ハーモニー」には大きな使命があった。それは「山谷全体をホスピスに！」という夢の具現化だ。山谷には今も3,500人にのぼる「住所不定・無職」の人たちがいるが、「きぼうのいえ」に入れるのは1%にしか過ぎない。

美恵さんたちの願いはこうだ。「山谷の町を歩いていると不自由な方がいっぱい目に入りますが、全員はうちでお世話できない。ならばドヤで寝ついている人たちの元へうちのスピリットとスタッフのやさしさを届けたい。ここを山谷の発信地にして光を伝えていきたいんです」

### 山本美恵さんのターニングポイント

- 1958** 長野県生まれ。看護師の母の毅然とした後ろ姿を見て育つ
- 1979** 都立豊島看護専門学校卒業後、循環器の研究機関附属病院に勤務。3年後、クリニックに転職。外来ナースとして働く
- 1991** 苦しい恋愛で失職。新しい挑戦をと医学・薬学系出版社に
- 1994** 36歳で看護系の出版社メヂカルフレンド社に転職。看護生向けの雑誌制作。覆食を忘れるほど仕事に打ち込む
- 1999** 20年越しの恋人が不慮の事故で他界。「人間は何のために生きるのか」を考える。価値観が変わっていく転換点
- 2002** 「山谷にホスピスを」と夢を持つ雅基さんと結婚。4月に緊急一時保護施設「なかよしハウス」を、10月に在宅ホスピス施設「きぼうのいえ」を開設
- 2003** 「きぼうのいえ」屋上に「聖家族礼拝堂」完成
- 2006** 3月、ヘルパーステーション事業（ハーモニー）を開始。4月、「きぼうのいえ」を運営する「山谷・すみだリバーサイド支援機構」がNPO法人認証を受け、理事に就任



▲循環器病院とクリニックで11年看護師として働く。クリニックでは大学病院の医師たちと交流。その人的財産が雑誌編集で生きる



◀ 恋愛のつらさを忘れるため仕事に没頭。編集は好きだったが、女将さん仕事との両立は無理とあきらめ退職

取材・執筆 土本亜理子 つちもと・ありこ ○ ノンフィクションライター。主著は『ふつうの生、ふつうの死』（文春文庫）『物語としての痴呆ケア』（三輪書店・小澤勲氏と共著）

★趣味・好きなもの.....時々無性にピアノが弾きたくなり、鍵盤へ。猫の「クララ」と「みその」に遊んでもらうのも大好き。